

2022年10月30日

陳述書

住所

署名 牧瀬 茜



1 私は牧瀬茜という舞台名でストリッパーをしています。始めたのは1998年です。当時、私はアルバイトで生活費を稼ぎつつ、自分の中にあるものを外気にさらしたいという気持ちから、詩や絵を書いたカードを都内の路上で販売していました。あるときストリッパーが通りかかり話し込むうちに彼女のステージを見に行くことになりました。横浜の黄金町の劇場でした。彼女は音楽に合わせて着ていたドレスを、時にゆっくりまた時に潔ぎよく脱いでいきました。私はその様子に解放感と開放感を覚えました。裸になった姿が気持ちよさそうに見えました。

自分は小学校のときに人間関係がうまくいかず、それ以来、人と衝突しないよう生きていました。周りの価値観に合わせ流されるように生きてきた自分にとって、ストリップは初めて自らやりたいと思ったことでした。ごく簡単な面接で採用が決まり、振り付けの先生に習って数日間練習したのち、船橋の若松劇場で初ステージを迎えました。

2 ストリッパーは劇場に所属する場合もあればフリーで活動する人もいます。が、どちらにせよ、ショーの演目の構成や曲の選定、ダンスや衣装の内容などは自分でプロデュースします。その一部を専門家に外注することもあります。その外注先も自分で決め、費用なども自分で交渉します。以前はストリップ専属の振付師も多く、複数の衣装屋さんの外商が劇場に出入りしていましたが、業界が小さくなるにつれ、今はどちらも少なくなりました。

私は、デビュー当初、劇場のオーナーや先輩ストリッパー、振付師などから言われたことをそのまま受け入れながらステージをつとめていました。当時は客の大半が男性で、ストリップ劇場も今より性的な要素が残る時代ではありました。その中で私はそういう要素の少ないアイドル路線で売り出されました。

記憶にあるのが、デビューステージ中、教わったタイミングにさっさとパンツを脱いだところ、恥じらいやじらすことが大切だ、と見ていた劇場の人に言われたことです。それから少し慣れてくると、お客さんが笑顔になったり、またホッとできるようなステージをしたいとも思うようになりました。

ストリップを始めて6年ほど経つと、次第に表現欲が湧いてきました。自分の内にあるものを踊りで表現するためには、踊りの基礎がないといけないと感じだしました。

当時、浅草ロック座という有名な老舗のストリップ劇場では、オーナーの方針で新人をラスベガスに研修に出していました。私は、当時所属していた若松劇場を中心に他の劇場に旅周りで出演する日々を送っていましたが、ロック座にも出演することがあってその研修の事を知り、オーナーに頼んで同行させてもらいました。3ヶ月間のダンス研修は宿泊費を除き自腹でした。毎日バレエやジャズダンスのレッスンを通して踊りを学び、そこから自分の体と向き合うようになりました。踊るということがより好きになり、裸になるという解放だけでなく、踊ることで心やからだを解き放つことを感じだし、それを今も追求しています。

3 それから10年目くらいまでは、人気面でも踊りという面でも充実した日々を送っていました。が、2010年頃から業界内、自分の周りでも、厳しさが増し、出演していた劇場が閉館したり、経営難になったりすることが増えました。東日本大震災と原発の影響もあったと感じます。私生活でも家族の介護の問題などが出てきました。また仕事上での人間関係の悩みもあり、いい心の状態でステージに立てないことが増えてきたため、私は2012年に休業をしました。それから数年は頼まれて稀に出演する程度で、ほとんどストリップから離れていました。

1990年代後半から2000年代は、ストリップ劇場が急激に減っていく時期でした。私が始めた頃は自分が出演していた劇場だけで40軒はあり、全国で100弱はあったと思いますが、今は全国で20軒弱となっています。閉店の理由は色々だと思います。時代のニーズや景気という要素もあります。大家さんが変わって、立ち退くことになったり、オーナーが亡くなって代替わりできずに閉館したところもありました。風営法の規制が厳しいために、新規にストリップ劇場を始めることはほぼ不可能であると聞いています。またその規制によって改修や建て替えが難しく、建物が老朽化して閉めざるを得ないというところもあったようです。

3年ほど休業していたところで、親しくしていた埼玉県栗橋の劇場から、劇場を閉めることを考えているから最後に出てみないか、と、誘われました。そ

ここで改めて踊り子として出演しました。しかし、その頃も、周囲で何軒かの劇場の閉館があり、栗橋の劇場オーナーは「今ストリップ劇場をこれ以上減らしてはならない」と思い閉館を思いとどまりました。その過程で、私自身も励まされ、もう一度ストリップをやっ払いこうという気持ちになり、今に至っています。

4 休業するまでは、踊り子=私の人生という感覚で、踊り子中心の生活を送っていました。今はそれと並行して、詩や写真、小説やお芝居などの表現活動をしています。

自分の踊り子としての立ち位置や演目について特に独特なものを行っているという意識はありません。自分が始めた頃に見たオーソドックスなストリップを私らしくやっているという認識です。ここ数年は、劇場以外で踊ったりお芝居をしないかと声をかけられ、いろいろな場でまたさまざまなジャンルのアーティストと共演もしています。先日は前衛的なチェロの演奏家の方と即興でコラボをしました。その時は、戦争と海と私について書いた自作の詩を語りながら踊りました。

2015年頃から沖縄の基地問題などに関わるようになりました。きっかけは、ジュゴンになって踊ってみたいかと声をかけられたことでした。自分はジュゴンを虐げている側にいる人間のひとりであり、また、沖縄を虐げている本土の人間です。虐げている側が虐げられている側を表現することに申し訳なさを感じ躊躇しましたが、これをやらせてもらうことで向き合っ払いこうと決意しました。今も2ヶ月に一度くらいのペースで沖縄に行きます。戦争の準備や軍事基地に抗議する為でもあります。辺野古、大浦湾の海を泳いでその神秘に触れる中で、海を守りたい思いも膨らみ、また、平和を願う人、沖縄を2度と戦場にしてはならないという思いで暮らしている人々に会いに行く旅でもあります。

さまざまな表現や活動の中で、ストリップはやはり自分にとって特別なものです。自分は身も心も裸になりたい、開放感を得たいという気持ちで始めました。しかし、その裸というものが売り物であるうちは開放感は得られないのではと感じました。ストリップというのは女性の裸を売り物にしている商売ですから、そこには何か噛み合わないものがあつたと思います。それから年齢を重ね、いわば自分の裸が性的な意味では売り物にならなくなつてきている中で、それでも見てくれる人があり、依頼があります。段々と自分が何を売り物にしてお金をいただいているのかわからなくなつてきています。常連のお客様から、私のダンスには裸の必然があるとおっしゃつていただくことがありまし

た。性的な意味を超えた何か、違う何かを醸し出すようになってきたのかもしれない。

衣服を脱いでも、自意識に覆われているうちは解放感は得られません。自分の内にあるものをおしころしているうちは開放感はありません。表現する仲間の中には、脱ぐ脱がないに関わらず、裸以上に裸だなと感じるミュージシャンなどもあります。裸という物理的なことに本質的な意味はない気がしつつも、しかし自分は、縁があってストリップに出会い、やはり裸になることや裸であることを通して裸を追求したい思いがあります。

以前は、自分のストリップのショーは裸を見てもらう、裸で見せるというのが90%くらいでした。それが少しずつ下がってきました。カタツムリのようにゆっくりとした歩みですが、少しずつ自分を出せるようになっていきます。最近ではストリップという仕事、ストリッパーという肩書きも脱いで裸になりたいという気持ちも湧いてきています。裸というのは丸腰です。究極の平和だと感じています。

5 コロナ禍の給付金をめぐる政府の言い分や東京地方裁判所の判決は報道などで見ていました。国民の理解が得られないとか、道義観念に反するといった点については、警察の匙加減でいつ摘発されてもおかしくないという環境に身を置いていましたし、ずっとそう思われているのだろうと感じていました。コロナ禍の支援給付金が対象外とされたときも、当初は「まあそんなものだよな」と思っていました。ただ、ストリップ劇場はコロナ禍で本当に大変でした。緊急事態宣言からしばらくほとんどの劇場が閉めていましたし、開けるようになってからも、不要不急の外出は控えるようにという状況や公演数客席を減らさざるを得ないなどで厳しい経営をやりくりしていたと思います。それを間近で見ると「そんなものだよな」でいいのだろうかと思問し始めました。差別されている側がそんなものだよなと諦めた時、自分も差別する側に回っているのではと気付きました。そうしたくないと思いました。

ストリッパーということで馬鹿にされたり見下されていると感じることはあります。私はそれに特に抗ったりすることはありませんでした。が、今回、報道などで裁判の話を知り、はじめてこれは沖縄などの他の差別問題と同じ差別の問題なのだと感じました。他のことで差別をやめよう、やめたいと活動しながら、自分の足下で起きていることに声を上げなくて良いのかと自問しています。同時に、自分自身のことは声をあげづらいものだと感じています。また、世の中にはもっとひどい差別がたくさんあるとも思うと気が引ける思いもあります。

裁判所や政府は国民の理解が得られないと述べているようですが、本当に国民はそう思ってるのかしら、と疑問です。そして、私たちストリップに携わる人々は国民じゃないと言われてるようなものだ、と話したあるストリップ劇場のオーナーの言葉が印象深く残っています。

私は、昔からいかがわしさが潜む街が好きでした。いかがわしさは、あるべきとまではいいませんが、あっても良いのではと感じています。街がどんどん見かけだけきれいにされようとしています。人間の中にはいかがわしさがあるのだから、街にもいかがわしさがあることは自然だと思います。それを間違っている、汚い、と締め付けて見えなくしてしまうことに違和感を抱きます。いま、ストリップを芸術と言ってくださる方は少なくありません。私は、崇高で美しいものというより、いかがわしさや猥雑を内包した芸術であると思っています。そういうものを排除しない社会の方がいいのではないかと感じています。

以上